

〈研究ノート〉

20世紀初頭アルゼンチンにおける 国家建設をめぐる問題提起

—移民コミュニティとの関係を手がかりに—

大場 樹 精

はじめに

これまでのアルゼンチン研究において、19世紀末から20世紀初頭にヨーロッパ各国から流入した移民は1930年代には同化し、それと時を同じくして移民コミュニティも姿を消したとされてきた。しかしながら、今日のアルゼンチンでは、当時の移民の自助組織に起源をもつ教育機関や医療機関が、移民コミュニティ外の社会に開かれた機関として存在している。これらの機関は、なぜ現在まで生き残ってきたのか。その役割や位置づけはどのように変化してきたのだろうか。

これらの問いに答えるための第一段階として、本稿は19世紀末から20世紀初頭に焦点をあてて先行研究を整理し、問題提起を行うことを目的としている。結論を先取りすれば、当時国家建設過程の初期にあったアルゼンチンにおいては、移民コミュニティの自助組織が国家を補完する役割を果たしていたと考えられる。

I アルゼンチンにおける移民研究の現状と問題点

すでに広く知られているので言うまでもないが、イタリアとスペインを中心とするヨーロッパ各国からのアルゼンチンへの人の移動は19世紀半ば

に始まり、1856年から1932年の間に約640万人が入国した。その結果、1869年の第1回国勢調査時には174万3353人だった総人口は、第2回調査時の1895年には395万4911人、第3回調査時の1914年には788万5237人へと4.5倍の増加をみせた。外国人人口は、それぞれ21万1991人、100万4527人、235万7952人と、半世紀足らずの間に実に11倍へと増加した。移民の増加は自然増を上回る規模で、総人口に占める外国人の割合は1869年には12.2%、1895年には25.4%、1914年には29.9%へと上昇した (Recchini de Lattes 1969 : 239-249)。

『国際移民の時代』の著者であるカースルズとミラーは、「先住民を犠牲にしながら発展してきた大規模移民の歴史の結果生まれた」国を「古典的移民国家 (classical countries of immigration)」と呼び、アルゼンチンは、米国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドと並んでその1つとされる (カースルズ・ミラー 2011 : 9)。これらの国々と比較した場合のアルゼンチンの最大の特徴は、移民の大規模な流入が国家建設過程と並行して進展したということであると筆者は考えている。移民が到着した当時のアルゼンチンは、新生の「統一国家」¹⁾として国家建設に着手したばかりであった。受け皿としての国家の制度建設が完了しないうちに、数多くの移民が押し寄せたのである。

このようなインパクトがあってもかかわらず、移民研究においてアルゼンチンはさほど関心を集めてこなかった²⁾。その理由の1つは、移民研究が米国の事例によって構築され、その後も英語圏で発展してきたためであろう。もう1つの理由は、歴史学者のモヤも指摘するように、アルゼンチン社会を「階級」という切り口で捉えることが一般化していることにある (Moya 1998 : 2)。言うまでもなく、1946年に労働者から熱狂的な支持を受けて大統領に選出されたファン・ドミンゴ・ペロンの影響が大きい。これはアルゼンチンを理解するために不可欠な視点ではあるものの、アルゼンチン研究をある種の膠着状態に置いてきたことも事実である。

他方で、当のアルゼンチンにおいても、1970年代にいたるまで移民研究

は萌芽すら見られなかった。この学術的無関心は、移民が不在の公的歴史が社会に浸透していたこと深く関連していよう。1970年代ごろまでのアルゼンチンで定着していた公的歴史は、20世紀初頭に独立100周年を迎えたアルゼンチンで「国民的なもの」が探し求められていた一環として創造されたものであった。最大の特徴は、植民地時代から独立直後の19世紀初頭の記述に圧倒的な重きが置かれていたことである。その一方で、19世紀半ば以降の出来事についてはわずかな記述に留められた。つまり、19世紀末から20世紀初頭の出来事である移民の流入と定着という現象が、公的歴史から必然的に消し去られたのであった（林 2003：342-344）。

これと並行して、移民に対しては同化政策が採られた。19世紀の末には、移民を国民化するために帰化の手続きが簡素化された。さらに、出生地主義に基づく国籍法が制定され、移民の子どもは両親の国籍にかかわらずアルゼンチン国籍が付与されることとなった。くわえて、国民教育に重点が置かれ、国歌および国旗への忠誠心や国語教育の普及が目下の課題とされた（Solberg 1970：85）。

これらのことは、移民の流入が国家建設期に起こったからこそ、アルゼンチンにおいては移民という存在を早急に公的空間から消し去ることが必要だったことを表している。そうすることでしかネイションを創造／想像できなかつたとも言えよう。こうして20世紀初頭に創造されたネイションは次第に社会に浸透し、公的空間から移民は長らく姿を消していた（Grimson 2003：148-152）。

一方で学術面に目を向けると、1960年代終盤になり、アルゼンチンにおいて移民が研究対象に取り上げられた。きっかけとなったのは、自身もイタリアからの移民であるジノ・ジェルマーニによる研究であったと考えられる。ただしそれはアルゼンチンの近代化に関する研究の一環であった。彼は、移民が労働力として近代化に貢献し、また労働者層と中間層という新しい階層を形成したことを指摘し、移民を近代化の担い手として位置づけた。その過程で、移民は同化し、移民が流入した当初の生活を支えた教

育・医療・メディアなどの機関は、公的および民間の制度が充実していくなかで役割を終え、消滅していったと述べている (Germani 1969)。移民を歴史上に登場させたものの、彼にとって、移民は過去の存在にすぎなかったのである。

1990年代になると米国で展開されてきた移民研究の枠組みで米国の研究者によってもアルゼンチン移民の研究が行われた。それらは、20世紀初頭アルゼンチン、特にブエノスアイレス市の多民族社会的側面を強調した。イタリア系移民を研究したサミュエル・ベイリーのほか、前述の歴史学者モヤもその代表である (Baily 1999; Moya 1998)。いずれも、20世紀初頭のブエノスアイレス市における各移民集団の居住空間、職業状況、社会生活について史料に基づいた詳細な研究を行った。ただし、移民を過去の存在として捉えるという点においては従来の研究と共通していた。どちらの研究も1930年以前を対象としており、それ以降の変化については何も明らかにされていない。

結局のところ、1990年代までのアルゼンチン移民研究においては、19世紀末から20世紀初頭に流入したヨーロッパ各国からの移民は、1930年代を境にアルゼンチン社会から「消滅」したことになっている。社会における新しい現象は、1980年代以降には移民が「アルゼンチン人」の共通の過去であるという理解が社会的に普及したことであった。ただし、あくまで過去の存在としてである。

しかし冒頭で述べたように、アルゼンチンには、当時の移民組織に起源をもつ制度や機関が存在する。今日では、エスニックな出自に基づく制限を設けずに社会サービスを提供している (宇佐見 2001: 270-271)。移民コミュニティの重要性が低下していったとするならば、それ以外の社会状況の要請に応じて、形を変えながら移民組織が現在まで生き残ってきたということだろうか。あるいは、アルゼンチン社会が移民コミュニティの組織を必要としていたということでもあるのかもしれない。

このことをふまえ、本研究は移民組織について、移民コミュニティとい

う枠の中に止めず、アルゼンチンにおける国家建設過程に位置付けることを提案する。つづいて本研究の枠組みと方法について説明することとした。

II 分析の枠組み

本研究では国家建設を、マイケル・マンの議論に基づき、社会の隅々まで浸透し、社会において掌握する範囲を拡大していくプロセスとして捉える。なお、ここでいう国家とは、現在国際社会を構成する単位で、永続的な人口、明確な領土、政府をもつ近代国家である。近代国家の歴史における根本的な新しさは、従来にない政治権力の中央集権化と凝集過程を確立したことである（デロワ 2013：49）。

封建的国家が解体し、新しい国家の形態が表れてきたなかで、なぜ近代国家が勝ち残ったのだろうか。社会学者のチャールズ・ティリーは、戦争の遂行に必要な行政、財政、規律上の要請が、国家構造の確立において決定的な要因となる、すなわち戦争が国家を作るという命題を提示した。ティリーにとって近代国家の主な活動は、国家を作り、戦争を遂行し、国家を守り、資源を徴収することで、それらは互いに強化しあう。こうして戦争時に国家構造が確立されると、それが平和時に安定し、国家は社会へ介入する分野を増やすことができた。戦争の効果のもとに国家は社会に対する支配を強め、より多くの人々を動員し、軍事的活動の調整を行う官僚制を設置したのである（Tilly 1992）。

マイケル・マンも、こうした徴税、動員、それを調整する官僚制度を国家の活動としているが、マンの貢献は、戦争の遂行を目的としない場合でも国家の力が増大するということを指摘し概念化したことである。彼によれば、19世紀の欧米諸国で、従来は財政支出の大部分を占めていた軍事部門が縮小し、代わって教育および交通運輸といった非軍事部門での支出が劇的に増加した。換言すると、国家が社会に対して影響を及ぼす範囲（scope）が拡大し、戦争を遂行することに特化した国家から、教育や交

通・輸送インフラといった非軍事部門も担う民政的 (civic) な国家になったのである。一部の国では社会福祉分野への公的支出も始まり、社会福祉国家の萌芽が見受けられる。こうして一度拡大した国家は、平時においても縮小しなかった (マン 2005b : 24-26)。

マンは、教育制度や交通や電信面のインフラストラクチャの整備といった非軍事的な国家の能力を、「基盤構造的な力 (infrastructural power)」という概念を用いて説明する (Mann 1984)。この力は、「中央国家が、その支配領域に浸透し、その決定をロジスティクスの面で実行に移す制度的な能力」 (Mann 1984 : 113 ; マン 2005a : 66) で、社会生活の多くの部分を調整する国家の諸制度を指す。この力をもって国家は社会の隅々まで浸透し、社会生活を「国家帰属化」 (“naturalize”)³⁾させていくのである (マン 2005a : 67-69 ; Mann 2012 : 59)。

国家の範囲の変化を分析するにあたって、マンは国家の財政動向に関する資料を用い、どの分野にどの程度の支出がなされたかを測定する。戦争の遂行に特化した国家の場合は軍事費の占める割合が高く、逆に教育といったインフラに向けられる支出が増大すれば、社会に対する国家の範囲が増大したことになる。繰り返しになるが、社会生活の隅々までをこうして国家帰属化することが、近代国家の大きな特徴なのである。

本稿ではこの枠組みを用いて、アルゼンチンにおける国家建設の過程を確認し、同じ枠組みのなかで、移民のコミュニティにおける自助組織の形成過程も明らかにする。移民組織の形成は、移民コミュニティが移民の生活をコミュニティの中に囲いこむプロセスであったとすることができる。このように考えると、国家と移民コミュニティは平行して基盤構造力を拡大させていたと考えられる。国家と移民コミュニティの基盤構造力については、統計資料を用いた分析が必要であるが、現時点では移民コミュニティが国家を補完する役割を果たしていたのではないかという問題提起をすることとしたい。それは、アルゼンチンの国家建設が、移民コミュニティの制度にも依拠する形で進展していったという過程として見ることも

できるのではないだろうか。

Ⅲ アルゼンチンの国家建設と移民コミュニティの形成

1. 国家建設のプロセス

先行研究によれば、アルゼンチンはラテンアメリカの中では比較的早い時期にある程度の国家建設が進展した (Centeno 2002 ; Kurtz 2013)。自由主義憲法が制定された1853年から、すなわち1862年の「統一国家」成立に先んじて、その準備は中央集権派の政治家や知識人たちによって着々と進められていた。その1つの焦点は、連邦派の立場をとり中央集権派と対立を続けるブエノスアイレス州をいかにして国家へと統合するのかという点にあった。

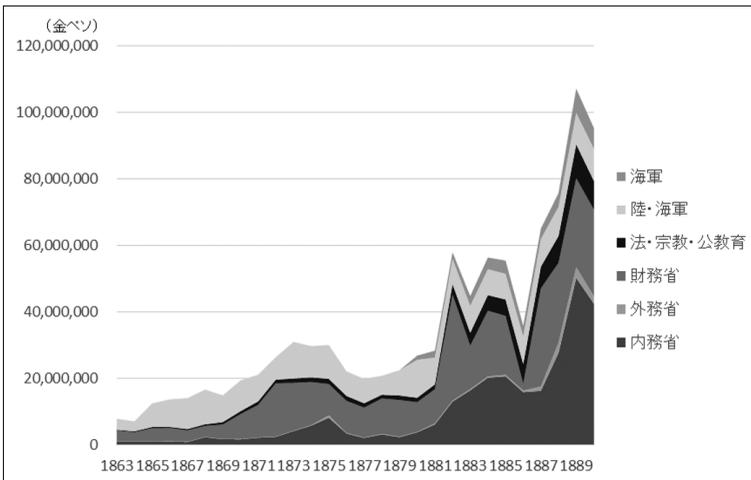
この国家建設プロジェクトをけん引していた中央集権派の自由主義者たちは、国家の財政基盤を確立するために不可欠な予算制度が未整備であることに懸念を抱いていた。財政基盤を確立するためには、ブエノスアイレス港の関税収入を国家の管理下に置くことが不可欠であった。1853年憲法において国家が関税収入を管理する旨が定められていたものの (第1章第4条)、実際に関税収入を管理下に置いていたのは、港が位置するブエノスアイレス市を擁するブエノスアイレス州であった。同港の関税収入は、1864年から1882年まで一貫して総税収額の70%以上を占め、1866年と1871年には100%に上った (Centeno 2002 : 124-125)。

ようやく関税が国家の管理下に置かれることとなったのは1859年であった。ブエノスアイレス州以外の州が形成する中央集権派の諸州連合とブエノスアイレス州の間で結ばれたサンホセ条約の第8条において、ブエノスアイレス州域内にある税関が国家の管理下に置かれることが定められた。こうして国家の予算制度を確立した諸州連合側の中央政府は、海外の金融市場で国債を発行することや、関税収入を担保に海外貯蓄を誘致することが可能となった (フェレール 1974 : 114)。

こうして財政基盤が整うと、国家の支出は増大の一途を辿った (図

1)。支出合計額は、1863年には800万金ペソであったが、60年代後半には倍以上に増加した。1870年代には2000万～3000万金ペソという水準が維持された。1880年代にはさらにその倍近くまで増加し、1880年代末は1億金ペソに迫る規模であった。

図1 歳出の規模と内訳の推移（1863～90年）



出典：Oszlak 1982：25を基に筆者作成。

支出部門を見てみると、1860年代には財務省と陸・海軍省の2つが支出全体をほぼ二分していた。財務省の支出は、もっぱら債務返済や利払いに使われていた。アルゼンチンは関税の国家管理化を達成したものの、税収だけでは支出を賄いきれず、外国からの直接投資と国債に頼るようになっていた⁴⁾。政府の債務サービスは財政支出のなかで高いウェイトを占め、経常収入の30～40%が充当されていた（フェレール 1974：123-127）。

陸・海軍省の支出の大半は、1864年に始まったパラグアイ戦争や国内の反乱鎮圧などのための支出であった。ただし「統一国家」成立当初は、組織化された軍隊を所有していたのは州政府であった。各州の州軍は、それ

ぞれの地域で由緒ある名家出身のカウディージョが召集・組織化し、自らが指揮を執るものであった。中央政府は、散在する諸州連合軍の中枢を集めてブエノスアイレス国民警備隊を組織することを目指すも、統合的な組織に発展することなく試みは失敗に終わった。そのため、1862年以降も反乱の対処は州軍に依存するよりほかなかった（林 1993：292；296-298）。

それでも、国家に対する反乱の鎮圧や足掛け5年間に及んだパラグアイ戦争を経て、軍隊は次第に国家の下に組織化されていった。最高指揮官を大統領が務めることになったことにくわえ、1869年には陸軍の士官学校、1872年には海軍の幹部養成学校が新設され、職業軍人が育成され始めた。さらに19世紀後半からの経済的な繁栄のもとで軍隊の制服や武器の整備が進められ、兵糧の支給量や俸給が引き上げられた。そのうえ、鉄道や電信などの技術的前進は国家の軍事能力を急増させた（林 1993：302）。

国家が管理する軍隊の制度化は、領土の画定を強力に促進した。これは、先住民支配圏の抑圧と、隣接国との国境の画定という2つの並行するプロセスをもって進展した。前者は、後に大統領も務めたロカ（Julio Argentino Roca）が将軍として指揮をとり、圧倒的な武力で展開された⁵⁾。これによって、先住民支配圏の土地が収奪され、その結果として北部パタゴニア・アンデスのネウケン、中部のチュブ、南部のサンタクルスなどブエノスアイレス以南の広大な土地が国家の勢力圏に組み込まれた。チャコやフォルモサも、鉄道の枕木用材を調達する目的で制圧された⁶⁾。他方で、1881年には米国大使館の仲介のもとでチリとの国境が画定され、1889年にはミシオネス地域を巡ってブラジルとの間で国境が画定された。

さて、図1で見たように、国家の範囲が大きく拡大していったのは、1880年代以降といえそうである。この時期、内務省の支出が顕著に増加していった。主な支出先の1つは、鉄道建設であった。アルゼンチン初の鉄道は、ブエノスアイレス市で1857年に開通した10キロメートルの路線で、大規模な鉄道建設は1862年以降に急速に進展した。統一国家の成立が政治的安定として有利に作用し、アルゼンチンへの外国資本の投下が始まった

のである⁷⁾。1862年から1880年代までに設立された4つの主要鉄道株式会社はいずれも英国資本で、アルゼンチンの鉄道輸送は英国資本の支配体制の下で展開された。これらの鉄道は、ブエノスアイレス港から南、北西、南西、西へと総延長を伸ばし、パンパの牧畜業・穀物の中心地と結ぶ放射線状の鉄道網が張り巡らされていった。この結果、1880年代から1910年代にかけて路線は、1880年の2500キロメートルから、1920年には3万4000キロメートル近くにまで延長され、世界でも10本の指に入るほどの規模を誇った。その一方で、パンパから離れた辺境地域への乗り入れや主要幹線間の接続といった、採算はとれないが国内を結び付ける役割を果たす鉄道の敷設は、中央政府や州政府が行った（今井 1983：108）。

都市のインフラストラクチャ整備も行われた。その1つは、港湾建設であった。ラプラタ川に面したブエノスアイレス市は18世紀から南米南部における重要な貿易港の地位を占めていたにもかかわらず、沿岸部分が砂浜であったうえに水深が浅かったため大型船が入港できないという問題を抱えていたのである（松下 1991：183）。19世紀後半に始まった大規模な移民の流入や貿易の増加を受け、ラプラタ川岸に埠頭を建設する工事に着手された。

そのほか、街路の規格化、道路の舗装、歩道の整備、ガス灯の設置、公園の建設によって、街の景観は大きく変容した。スペイン様式で碁盤の目をなしていた市内の道路は、対角線状に走る通りやパリの通りを意識した街路樹がある大通りによって飾られていった（松下 1991：184）。

さらに、黄熱病の流行以降には、公衆衛生分野での制度づくりが行われた。黄熱病は1871年に流行し、約1万3760人が命を落とした。この事態を受け1873年にはブエノスアイレス大学医学部に公衆衛生学講座が設置され、そこで養成された衛生学者や医師が、都市貧困層の身体的健康の問題に関与し、労働現場、住居、娯楽施設での衛生状態の視察を行うようになった（林 1998：83-84）。上下水道の整備、移動手段としての馬車の廃止、行政機関によるゴミの収集などの制度も整えられていった（Moya

1998 : 150-152 ; 林 1998)。疫病の蔓延によって、従来はブエノスアイレス市南部を中心に生活していた上流階級や形成されつつあった中産階級がその南部を打ち捨て、北部へ移動と移動した。彼らがそれまで住んでいた南部には多くの移民労働者が流れ込み、かつてブルジョアが住んでいた館を集合住宅に変え、その他荒地に残されたあばら屋などに住み始めた(林 1998 : 83)。

もう1つの重要分野は、教育であった。国家としての包括的な教育方針は、1884年に初等教育法(法律1420号)として定められた。その柱は、6歳から14歳の児童への教育の無償化、義務教育、世俗教育であった。さらに、従来は州政府に委ねられていた教育内容にまで国家が介入し、管理下に置くという方針が明確化された(林 2007 : 52)。この政策に沿って教育機関が次々と建設された。師範学校も創設された。

ただし、実際に公教育が社会に浸透していたかどうかは別の問題であった。当時の初等学校では6年間の就学期間を終えることなく退学する生徒が高い割合を占めていた。1886年から91年にかけては98%、93年から98年にかけても97%に上った。またいずれの時期においても、1年次から2年次に進級する際に3分の1以上が、それ以降は年次が上がるたびに半数を超える生徒が学校を去っていた(林 2007 : 52)。教育の制度化は進められていたものの、実際の現場での運用はや人びとの生活への浸透という段階には達していなかったのである。

国家の教育政策を補完する役割を果たしていたのは、隣人組織や移民協会などが運営した地域コミュニティにおける教育であった。こうした学校を、国家は後追的に認知していった。たとえば、ブエノスアイレス市北西部の隣人組織の支援を受けて、1914年に開校した成人向けの補完校 D. E.XIII 校は、翌年に国家に公認された。その4年後には成人学校に関する新法令が施行された(林 2007 : 55-62)。

また、社会福祉部門への国家の介入は、19世紀後半のヨーロッパでも一部の諸国で見られたに過ぎないが、アルゼンチンにおいては早くも年金の

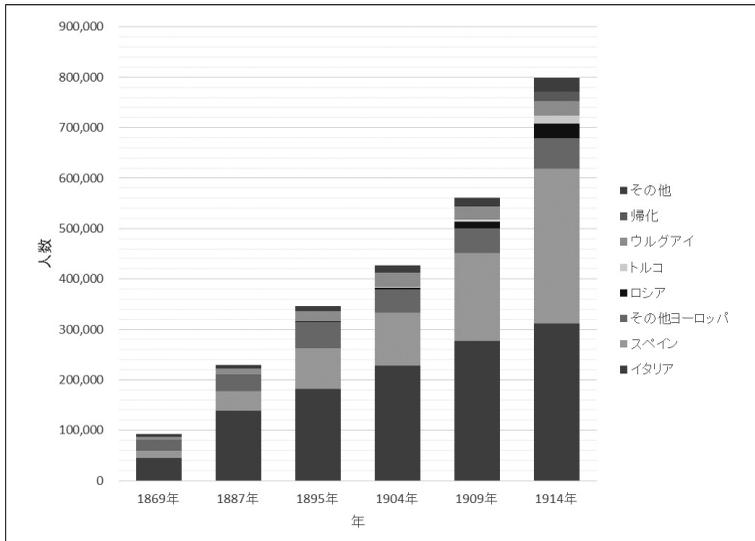
起源だとされる軍人・教員・高級官僚への年金の支給が開始されており、これが年金制度の起源となった。ただし、それ以外の職業や立場の人びとは支給の対象ではなかった。1904年には連邦政府の全公務員への年金の支給が法律436号で定められたが、さらに年金制度の整備が進んだのは1910年代以降であった。1915年には鉄道労働者、1921年には公共サービス部門労働者、1923年には銀行従業員と新聞労働者など、職業ごとの制度化が進められていったのである（宇佐見 2011：58）。

以上のことから、アルゼンチンにおける国家建設のプロセスは、はじめから非軍事部門の重要性も認識され、急ピッチで進められたことがわかる。国家の規模および範囲はこの時期確実に拡大した。財政や軍隊は、国内の異なるアクターから権力や富を奪う形で国家の管理下に置かれた。そのほか、交通インフラや都市での港湾施設や衛生施設の整備によって、国家は社会へと浸透を始めた。ただし、社会に浸透していたのは国家だけではなかった。教育や社会福祉において見られたように、隣人組織や労働組合の方が社会的機能を果たしている面もあった。次節で見る移民コミュニティもそうした国家以外のアクターの1つであった。

2. ブエノスアイレス市の移民コミュニティにおける制度建設

19世紀末から20世紀初頭にかけての移民の流入で最も影響を受けたのは、首都のブエノスアイレス市であった。外国人比率は1869年の第1回国勢調査時には52%、1887年に行われた首都の調査においても53%を占めた。20世紀に入ってもその割合は高く、1904年には45%、1914年でも51%に上った。生産年齢人口（15歳から59歳）にいたっては64.1%（1914年）を占めた。

図2 ブエノスアイレス市の外国人人口



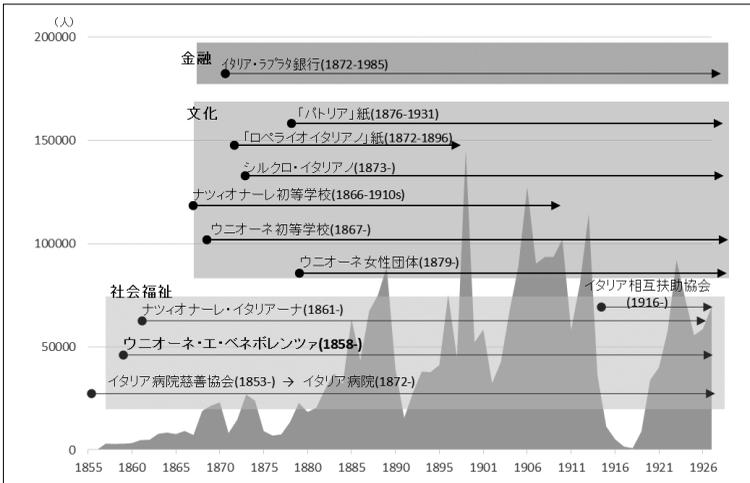
出典：Recchini de Lattes 1969：239-249を基に筆者作成。

国籍別にみると、最も多かったのはイタリア人である。1887年には同市の外国人人口の60%を占め、1895年にも53%、1909年にも49%を占めた。アルゼンチン人も含めた総人口で見ても、1869年には4人に1人がイタリア人という状態であった。次いで多かったのがスペイン人である。1887年には同17%にすぎなかったが、1904年には25%まで増え、1914年には38%を占めた。スペイン人の大規模な流入はイタリア人の流入に遅れて始まったことを表している（Recchini de Lattes 1969：239-249）。さて、これらのコミュニティでは、どのような制度や機関が作られたのだろうか。先行研究を参照しながら見ていこう。

(1) イタリア系移民⁸⁾コミュニティ

イタリア系移民の生活は、インフォーマルなネットワークに依存していた。イタリア系移民は、ブエノスアイレス市の港で船から降りると親戚に出迎えられ、初期の宿泊場所や食事が与えられた。職の斡旋もそれに依存していた。それと同時に、1850年代から形成されていった移民コミュニティの自助組織といったフォーマルな制度にも支えられていた。

図3 イタリア系移民の流入人数と移民組織の動向



出典：筆者作成。

ベイリーは組織の設立動向を、大きく3つの時期に分けているが、本研究にとって重要なのは第1期（1850年代～70年代）である。コミュニティの基盤となる組織が作られた時期にあたる。組織の設立には、組織運営のノウハウを持っていた政治亡命者を中心とするイタリア北部出身の知識人が携わった。

1853年には後にイタリア病院となるイタリア病院慈善協会が建設された。表1からも明らかなおおり、移民協会が運営する医療機関は怪我を

負った、あるいは病に伏した移民にとっての拠り所であった。移民コミュニティ以外の病院に外国籍患者が入院していることから、それら一般の医療機関が移民の診察を拒んでいたわけではないことは推察できる。それでも、医療という命にかかわる分野において出身地域の言葉が通じる機関を好むということは想像できる。

表1 ブエノスアイレスにおける主要医療機関別入院患者数

患者の国籍 病院名	1900		1905	
	アルゼンチン籍	外国籍	アルゼンチン籍	外国籍
リバダビア (女性)	1,228	1,587	1,710	1,806
クリニカス	942	1,491		
サンロケ	2,182	3,922	2,485	3,352
サンルイス (小児科)	759	123	1,565	166
軍	1,624		2,083	
ラウソン	1,351	2,289	1,841	2,638
アイスラミエント	1,111	979	2,324	1,899
ノルテ	279	565	722	1,047
イタリア病院	170	1,885	403	1,998
スペイン病院	112	1,292	237	1,718
フランス病院	42	830	107	976
イギリス病院	145	827	262	1,089
ドイツ病院	38	549	86	906

出典：Municipalidad de la Capital (República Argentina) Dirección General de Estadística Municipal 1900：218；1905：209を基に筆者作成。

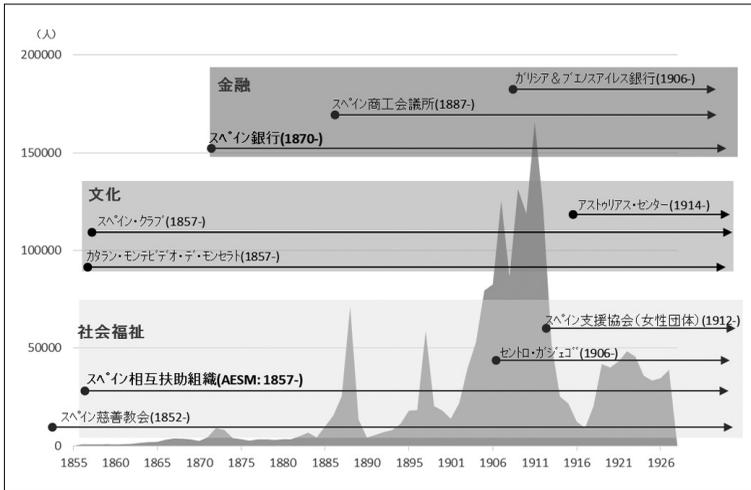
1858年には、その後コミュニティ内で最も凝集力をもつことになるウニオーネ・エ・ベネボレンツァ相互扶助団体 (Asociación Unione e Benevolenza, 以下「ウニオーネ」とする) が、相互扶助、基金の設立、教育、労働者の保護を目的に設立された。ウニオーネは1867年には初等学校を設立し、移民の子供たちに対して出身国の国民教育を提供した。生徒数など具体的な数値は確認できていないが、教育機関としての成熟度は高かったようである⁹⁾。アルゼンチンで公教育の重要性が認識され始めた1885年にはアルゼンチンの宗教・教育大臣が、同校におけるイタリア国民としての

教育に懸念を表明したほどであった (Bertoni 2001 : 64)。

これらの組織は、19世紀末から始まる大規模な移民の流入時に、新移民の受け皿となった。ウニオーネの場合、発足時の加盟者は53人であったが、1860年には2800人にまで増加し、1880年代に移民の流入が急増すると6300人にまで増加した (Baily 1982 : 488-490)。

(2) スペイン系移民コミュニティ

図4 スペイン系移民の流入人数と移民組織の動向



出典：筆者作成。

他方で、スペイン系移民の組織化は、スペイン系移民に厳しい規制を敷いていたブエノスアイレス州知事であったロサス (Juan Manuel de Rosas) による支配が1852年に幕を閉じるとすぐに始まった。1857年には、スペイン・クラブ、スペイン病院を運営した慈善協会であるスペイン相互扶助協会 (Asociación Española de Socorros Mutuos de Buenos Aires; ASEM) が設立された。ASEMは創設された1857年時点では会員数は60人であったが、1920年代初頭にはその数は3万3000人にのぼった (Moya

1998 : 288)。1870年代には銀行も設立され、その準備残高はアルゼンチン内のいずれの国立・州立銀行をも上回る規模を誇った (Moya 1998 : 285-286)。

スペイン人の場合にも、組織化は大規模な移民の流入が始まるよりも、かなり早い段階で進められた。図4からもわかるとおり、スペインからの移民の大規模な流入は、1900年代に入ってから始まった。しかし、主要なスペイン系移民組織は1850年代に形成された。スペイン人コミュニティには植民地時代の征服者にルーツを持つ名家の末裔や同時期に渡ってきた大商人の子孫がおり、イタリア人コミュニティ以上に組織運営のノウハウに長けた人々が多かった。

ブエノスアイレス市のスペイン系コミュニティのもう1つの特徴は、ナショナルな組織と地域主義的組織が共存していたことである。全スペイン人を対象とするナショナルな組織の発展と並行して、出身村や出身地方ごとにメンバーシップが限定され、会員同士の関係が強い同郷団体が作られた。それらの団体の場合、構成員がナショナルな組織よりも少ないために、各構成員のコミットメントが緊密であった。ガリシア出身者のセントロ・ガジェゴは、1907年に創設され、第一次世界大戦までに会員数は6646人を数え、ナショナル組織に匹敵する規模を誇った。このように地域主義的組織とナショナル組織が相互補完的に併存していたこと、さらにナショナルな組織の創設が地域主義的な組織の登場に先行していたことがスペイン系移民の特徴であった (Moya 1998 : 277-331)。全国組織のメンバーは、同時にこうした地域主義的組織のメンバーでもあり、双方は相互補完関係を築き共存し、ブエノスアイレス市のスペイン系移民の生活を全面的に支えていたのである (Moya 1998 : 291)。

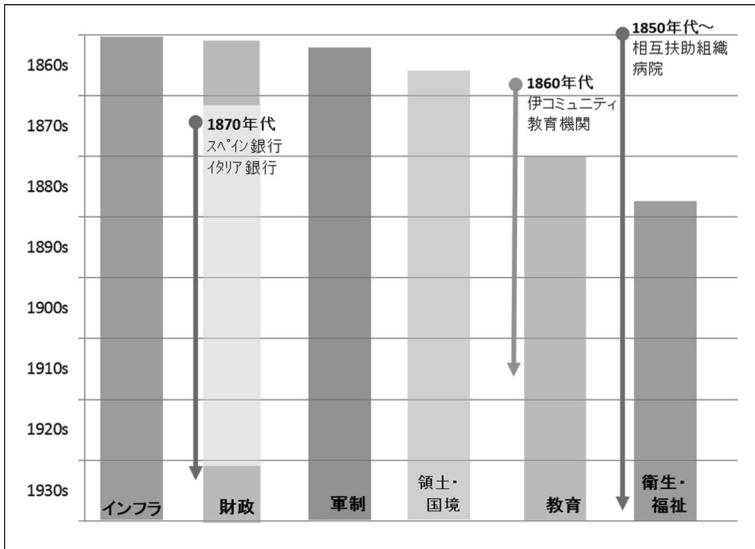
V まとめ

本稿の前半で明らかにしたように、アルゼンチンは1850年代から国家建設に着手した。1880年代までに関税を国家の管理下におき、軍隊の組織化、領土の画定など、マンの言うところの軍事部門における国家建設が進められた。中央集権化に抵抗し続けたブエノスアイレス州とは半世紀近くに及んだ対立の末に合意に至り、他州においてもカウディージョが所有していた富や権力は国家化された。

1880年代に入り、国家は基盤構造力を大きく強めた。交通や輸送インフラの建設を国家が主導し、公教育や公衆衛生分野での制度が作られた。こうしてブエノスアイレス市などの大都市における社会の国家帰属化が徐々に進展した。

ただし、教育や社会福祉においては、国家以外のアクターも大きな役割を担っていたことを忘れてはならない。国家が影響を及ぼす範囲は、教育や社会福祉の分野においては拡大の途上にあった。国家や地域社会、隣人組織以外に社会生活に浸透していたのは、移民コミュニティであった。本稿の後半では、アルゼンチンの国家建設と並行して、移民コミュニティにおいて制度的機関が設立されたことを確認した。このことから、移民コミュニティが国家の基盤構造力を補完し、移民コミュニティに依拠するアルゼンチン社会が構築されていったと考えることはできないだろうか。この2つのプロセスをまとめたのが図5である。

図5 アルゼンチンにおける国家建設と移民コミュニティの制度建設



出典：筆者作成。

国家は基盤構造力を拡大させるために、これらの移民組織をどのようにして国家に帰属させるかという問題に取り組むことになった。これらの移民組織に起源をもつ教育機関や医療機関が現在も存在していることを今一度思い起こすと、国家は現在に至るまでそれらの機関を国家の範囲に包摂できなかったということなのだろうか。あるいは、社会における国家と移民コミュニティの境界が見出せないほどに、両者が相互浸透していったということなのだろうか。

今後の課題は、移民コミュニティと国家の及ぼす範囲について史料を用いて実証していくことである¹⁰⁾。なお、20世紀初頭のアルゼンチンには、地域コミュニティや労働組合など、人々の生活に浸透しているアクターは複数存在した。これら他のアクターも視野にいれながら、「移民であることが共通の過去」であるアルゼンチンにおける「移民コミュニティと国家の関係」を考察していくこととしたい。

註

- * 本稿は、2014年6月に開催された日本ラテンアメリカ学会第35回大会パネルC「2つのアルゼンチン」の報告ペーパーを基にしている。ディスカッサントの鈴木茂先生、当日質問をくださった先生方、そして本稿の査読をくださった先生方に深く感謝申し上げたい。
- 1) 1862年時点では後に首都に制定されるブエノスアイレス市の帰属をめぐる対立を中心に依然としてブエノスアイレス州とその他の州が対立していたため、一応「統一国家」の形を成したにすぎない。その意味で括弧つきとしている。
 - 2) 移民を専門とする歴史学者のモヤ (Jose Moya) は、受け入れ国別の移民研究の数を挙げている。アルゼンチンの移民を扱った研究は、米国の移民を扱った研究の3.8%、カナダを扱った研究の約16%の数しかなされていない (Moya 1998: 2)。
 - 3) 佐藤によれば、ここでいう“naturalize”とは、通常「帰化」と翻訳されるような国籍を取得するという意味と、「自然になる」という意味が掛け合わされている。人々の社会生活は、基盤構造的な力を通じて国家に帰属するものとなり、その状態が自然で自明のものになるという意味が込められている (佐藤 2006: 26-27)。
 - 4) このことは、国家の社会に対する徴税能力が弱かったことを表している。国家の収入面についての分析は稿を改めて行いたいと考えている。
 - 5) その背景にはまた、先住民は人種的に劣っているという考えに適者生存の法則を当てはめ、ブエノスアイレス市の南方や北部国境地帯に居住していた先住民を殺戮し土地を収奪した。
 - 6) 1882年にはこうして国家の管理下におかれた公有地を売却する法律が定められた。そこでは最高購入面積の制限、入植、耕作の義務が規定されたにもかかわらず、一個人がいくつもの名義を用いるなどの方法で、大土地所有者および土地会社への土地集中が進んだ (今井 1985: 138-140)。
 - 7) ただし、政治的安定だけではアルゼンチンは投資先として目立った魅力を持たず、中央や州政府が一定の利益を保証するという条件を設けたうえで、ようやく投資が行われたのである。詳細は今井1985を参照されたい。
 - 8) なお、本稿では「イタリア系」「スペイン系」といったように国家を単位とした呼称でそれぞれの移民コミュニティを見ている。しかし、実際には様々な地域からの移民であったために、そもそもこのようにナショナルな名の下に一元化できるのかには注意が必要である。本稿ではさしあたりこの呼称を用いたが、今後の研究を進めていくなかで適切な呼称について考えていくこととしたい。
 - 9) ただし、当時のブエノスアイレスの公立校と同じくドロップアウト率は高

- かった。イタリア系の初等学校でも、1897年において、在籍する1年生531人のうち5年生まで残ったのは35人(7%)にすぎなかった(林 2007:52)。
- 10) 労働組合や相互扶助組織は、ペロン政権期に国家化された。本稿では紙幅の関係で労働組合には触れることができないが、アルゼンチンにおける国家の掌握範囲の拡大プロセスを研究するにあたって、重要な比較対象になると考えている。

【政府刊行物】

Anuarios Estadísticos de la Ciudad de Buenos Aires, 1891–1923, Dirección General de Estadística y Censos (Ministerio de Hacienda) (CD Rom).

【日本語文献】

- 今井圭子. 1983. 「アルゼンチンの鉄道業とパンバの変容」(『社会経済史学』48巻5号)、102–118ページ。
- . 1985. 『アルゼンチン鉄道史研究』アジア経済研究所。
- 宇佐見耕一編著. 2001. 『ラテンアメリカ福祉国家論序説』日本貿易振興会 アジア経済研究所。
- . 2011. 『アルゼンチンにおける福祉国家の形成と変容—早熟な福祉国家とネオ・リベラル改革』旬報社。
- カースルズ, S. M. ・ J. ミラー. 2011. 『国際移民の時代 [第4版]』関根政美／関根薫監訳、名古屋大学出版会。原著 Stephan Castles and Mark J. Miller. 2009. *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World* (4th edition) (Hampshire: Palgrave Macmillan).
- 佐藤成基. 2006. 「国家の檻—マイケル・マンの国家論に関する若干の考察」(『社会志林』53巻2号)、19–40ページ。
- デロワ, イヴ. 2013. 『国民国家 構築と正当化—政治的なものの歴史社会学のために』中野裕二監訳、吉田書店。原著 Yves Déloye, *Sociologie historique du politique* (Paris: La Découverte, 2007)。
- 林みどり. 1998. 「接触と領有—19世紀アルゼンチンの近代化過程における言説の政治」東京外国語大学博士学位論文。
- . 2003. 「<アルゼンチン文学>の誕生と文化的実践としての読書」(『明治大学人文科学研究所紀要』第52冊)、339–353ページ。
- . 2006. 「模倣の文化政治：ラプラタ地域における〈他者〉の領有をめぐる文化的抗争の分析」(『明治大学人文科学研究所紀要』第59冊)、117–148ページ。
- . 2007. 「本を読む労働者—ブエノスアイレス市の教育・出版・地域コミュニティ」(牛田千鶴編著『ラテンアメリカの教育改革』行路社)、47–64

ページ。

- フェレルル, アルド. 1974. 『アルゼンチン経済史』 松下洋訳、新世界社。
- 松下マルタ. 1991. 「ブエノスアイレス—南米のパリからラテンアメリカ型首都へ」(国本伊代・柴浩子編著『ラテンアメリカ 都市と社会』新評論)、174-197ページ。
- マン, マイケル. 2005a. 『ソーシャルパワー：社会的なく力>の世界歴史Ⅱ—階級と国民国家の「長い19世紀」』(上) NTT 出版株式会社。
- . 2005b. 『ソーシャルパワー：社会的なく力>の世界歴史Ⅱ—階級と国民国家の「長い19世紀」』(下) NTT 出版株式会社。

【外国語文献】

- Baily, Samuel L. 1982. “Las sociedades de ayuda mutua y el desarrollo de una comunidad italiana en Buenos Aires, 1858-1918”, *Desarrollo Económico*, v. 21, No.84, pp.489-514.
- . 1999. *Immigrants in the Lands of Promise : Italians in Buenos Aires and New York City, 1870-1914* (Ithaca and London : Cornell University Press).
- Bertoni, Lilia Ana. 2001. *Patriotas, cosmopolitas y nacionalistas : la construcción de la nacionalidad argentina a fines del siglo XIX* (Buenos Aires : Fondo de Cultura Económica de Argentina).
- Centeno, Miguel Angel. 2003. *Blood and Debt : War and Nation-State in Latin America* (Pennsylvania : The Pennsylvania State University Press).
- Germani, Gino. 1969. “Mass Immigration and Modernization in Argentina” in Irving Lois Horowitz, José de Castro and John Gerassi (eds.) *Latin American Radicalism : A Documentary Report on Left and Nationalist Movements* (New York : Vintage Books), pp.314-355.
- Grimson, Alejandro. “La vida política de la etnicidad migrante : hipótesis en transformación”, *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, número 50, pp. 143-159.
- Kurtz, Marcus J. 2013. *Latin American State Building in Comparative Perspective : Social Foundations of Institutional Order* (Cambridge : Cambridge University Press).
- Mann, Michael. 1984. *The Autonomous Power of the State* (Oxford : Blackwell).
- . 2012. *The Sources of Social Power-Volume 2 : The Rise of Classes and Nations-States, 1760-1914 New Edition* (New York : The Cambridge University Press).
- Moya, Jose C. 1998. *Cousins and Strangers : spanish Immigrants in Buenos Aires, 1850-1930* (Berkeley : University of California Press).

- Oszlak, Oscar. 1982. *La conquista del orden político y la formación histórica del estado argentino*.
- Recchini de Lattes, Zulma L. et al. 1969. *Migraciones en la Argentina : estudio de las migraciones internas e internacionales, basado en datos censales, 1869–1960* (Buenos Aires : Editorial del Instituto).
- Solberg, Carl. 1970. *Immigration and Nationalism : Argentina and Chile, 1890–1914* (Austin and London : University of Texas Press).
- Tilly, Charles. 1992. *Coercion, Capital and European States, AD 990–1992*, (Malden : Blackwell).

〈Resumen〉

Sin inmigrantes no hay Estado : planteamiento acerca del proceso de la construcción del Estado Argentino

Kodama OHBA

Este trabajo intenta plantear una discusión sobre el rol de las instituciones de las comunidades de los inmigrantes en la Argentina. Se estima que estas instituciones complementaban el papel del Estado al comienzo del proceso de la construcción del Estado Argentina.

Argentina es muy bien conocida por haber recibido numerosos inmigrantes desde la segunda mitad del siglo XIX hasta el comienzo del siglo XX. Más de 6 millones de inmigrantes arribaron a los puertos de Argentina desde el año 1856 hasta el 1932. A pesar de esto nunca ha sido la protagonista en los estudios migratorios. Una razón es porque existía una tendencia de explicar y entender a la sociedad argentina desde el punto de vista de las clases sociales. Como otra gran razón, cabe nombrar que la historia oficial, la cual no incluía a los inmigrantes como parte de ella, ya estaba ampliamente difundida dentro de la sociedad.

Al fin, en los años 70 llegó el interés académico hacia la inmigración en la Argentina. No obstante, tanto los estudios migratorios de los años 70 realizados en la Argentina como los de los 80 y 90 realizados por los investigadores norteamericanos coinciden en que hacia la década de los 30 los inmigrantes llegaron a integrarse a la sociedad argentina hasta el punto de

hacer inexistentes sus comunidades.

Sin embargo, en Buenos Aires, podemos observar que las instituciones educativas, médicas etc. que pertenecían originalmente a la comunidad de los inmigrantes, siguen existiendo, abiertas a la sociedad. ¿Cómo ha transformado el papel de estas instituciones en la sociedad argentina dentro del transcurso del tiempo? Y ¿por qué han sobrevivido hasta nuestros tiempos?

Si pensamos que la importancia de las comunidades de los inmigrantes iba disminuyendo, ¿la razón de que sobrevivieron se debe a la demanda de la sociedad argentina? O, ¿se podría decir que el Estado necesitaba de las instituciones de los inmigrantes por alguna razón? Para buscar respuesta para estas preguntas este trabajo propone investigar la formación de las comunidades de los inmigrantes como un hecho paralelo a la construcción del Estado, basándose en el concepto denominado “poder infraestructural” del estado por el sociólogo británico Michael Mann. Con “poder infraestructural” se entiende como la capacidad del Estado para penetrar realmente en la sociedad civil, y logísticamente poner en ejecución las decisiones políticas por todo el país.

En la Argentina empezaron la construcción del Estado en la segunda mitad del siglo XIX después de más de 50 años de conflictos internos. El poder infraestructural del Estado se creció significativamente alrededor del año 1880. Nacionalizaron la aduana de Buenos Aires, establecieron un monopolio sobre la movilización militar, establecieron el sistema educativo público entre otros. Estos ejemplos muestran el crecimiento y la diversificación de los gastos públicos.

Simultáneamente, los inmigrantes establecieron sus instituciones propias. Escuelas primarias, bancos, socorros mutuos y hospitales por nombrar algunos ejemplos. El Estado argentino no era capaz de penetrar la

vida social de los inmigrantes. En consecuencia, Argentina vino desarrollando sobre esta base contando con las instituciones de los inmigrantes.